問題としての〈社会的なもの〉*

厚　東　洋　輔**

1　思考の習慣としての社会

1987年のことであるが、イギリスの首相マーガレット・サッチャー Thatcher は女性誌のインタビューに答えて次のように述べている。

「私は思うのだが、長年にわたり through　a period 私たちが居つづけてきたのは、あまりにも多くの人々が次のように考えるよう仕向けられてきた地点であった」。「人々は何か問題が起こると社会にそれをぶつけてきた」。たとえばこども達に何か問題が起こるとする、そうするとその責めを負わされるのは社会である。「しかし皆さんもご存じのように、社会といったものは存在しない。存在するのは、個々の男と女であり、家族である。」（Thatcher，1987）

There is no such thing as society.

「社会」ということで、人々の共同生活一般を指すとすれば、この命題は全くの間違いであろう。人間がまったく無能力な赤子としてこの世に生を享け、一人前になるまで少なくとも10年は要するという生物である以上、人類の誕生以来「社会」が存在しなかった時代はない。「家族」は人間が誕生し・生育し・労働し・死んでいくためにどうしても必要とする「社会」の典型であり、「家族」が複数あれば、その間には「家族」と異なった社会関係を擁する「社会」は必ず存在した。人々の結合である社会は常に存在してきたし、人類の滅亡まで存在し続けるであろう。

Thatcher の言っている「社会」とはもっと限定された様態における人間結合を指す。彼女が存在しないと指摘しているのは、現代人の思考の習慣の中で存在し続けてきた「社会」のことである。私たちが存在すると思うように仕向けられてきた「社会」には、それが始まる起源があるはずである。起源があれば、そうした思考の習慣が摩滅して消滅する時期があるのも当然であろう。私が語りたいのは、人々の――現代人 contemporary の思考の習慣の中に存在し続けてきた「社会」の興亡の物語である。

現代人の中で脈々と生きつづけてきた思考の習慣は一体誰が形作ってきたのか。私は、それは「社会学者」である、と答えたい。社会学者達が研究の対象としてきた「社会」こそが、Thatcher がその存在を否認したかった「社会」のコア部分をなす。

さて Thatcher が「死亡宣告」した、あるいは「死亡宣告」することを求めた「社会」は一体何時始まったのだろうか。私の考えでは、その起源は19世紀の半ば、強いて時点を特定化するとすれば、1848年に求めるのがもっとも適切である。1848年は、フランスに発した「二月革命」の嵐がヨーロッパ大陸を席巻し、ドイツ諸邦では「フランクフルト議会」が開催され、またマルクス・エンゲルスの起草した『共産党宣言』が刊行された年であった。

「社会」の存立を可能にした現代人の「思考の習慣」が広く受け入れられた時期 period を正確に確定するとすれば、それは、1848年から2000年に至る150年の期間である、と言うことができるだろう。

2　起点としての1848年革命

1848年の革命に際会してアレクシス・ド・トクヴィル Alexis de Tocqueville は、次のような印象

*キーワード：社会学、社会問題、社会的なもの
**関西学院大学社会学部教授

的な覚え書きを残している。

「民衆はまず、すべての政治制度をかえることを通じて、相互に支え合っていこうとしたのである。しかし政治制度をいくら変えても、自分たちの境遇は少しも変わらないか、変わったとしても彼らの欲求のさし迫った状況からすると、まったく耐え難いほどわずかであることが分かったのだ。こうして、ついに民衆はいつの間にか、自分たちをその地位に閉じこめておくのは、政府の組織などではなく、社会自体を成り立たせている不変の法則であることを、不可避的に発見した。」(Tocqueville，1850／1893，訳，132．なお引用文における傍点は特に断りのない限りすべて厚東のもの。以下同様)

「(二月革命の中で生み出された) こうした理論は、それぞれ、ずいぶんと異なっていて、相互に矛盾することもしばしばで、敵対するものですらあった。しかし、こうしたものすべては、政府よりももっと底辺のところにねらいをつけていて、彼らを支える社会自体を手に入れようと努力していたのであり、社会主義という共通の名称を掲げていた。」(Tocqueville，1850／1893，訳，131)

Tocquevilleの文章を貫く緊迫感は、ついに「社会」を発見したという興奮、ついに物事の本質を見出し、それを「社会」と命名しえた高揚感に由来する。その調子の高さは、未知の大陸を発見した冒険者の体験談、素粒子に思い至った研究者の論文を彷彿とさせる。こうした文章を読むと、どうしても、1850年以前には「社会」というものは知られていなかったようだ、「社会」は19世紀の中葉に至りようやく発見されたと感じざるをえない。

しかしいうまでもなく「社会」は、ラテン語に由来する言葉で、19世紀をはるかに遡る長い歴史をもっている。たとえば英語では14世紀後半にはすでに知られていた。Tocquevilleの「社会」についての報告は、厳密に言えば、社会の〈社会主義的〉とでも名付けることの出来る新しい用法の始まりに関する体験談である。彼のエキサイティングな口調から窺えるのは、こうした用法が、その当時いかに斬新に映り、驚異的なものであったかという事実である。

「社会主義的」socialistは、レイモンド・ウイリアムズR. Williams (1976) によれば、societyに比べれば比較的新しい言葉で、それは19世紀の初頭にようやく登場した新造語であるという。自らをsocialistと呼ぶ多くの集団と思潮の間では、Tocquevilleの指摘にもあるように、長い・錯綜とした・熾烈な論争が繰り広げられていた。したがって「1850年頃までには、socialistはあまりにも新しく、あまりにも漠然としたものだったので、支配的な用法は存在しなかった」のである。

私たちが慣れ親しんできた「社会主義的」に類似した言葉としては、co-operative (協同的)、mutualist (相互扶助的)、associationalist (連合的)、phalansterian (ファランステール的)、agrarianist (土地均分論的)、radical (急進的) と言った用語が多数存在し、今では周縁に追いやられているこうした言葉の方が、むしろ一般的であった。今列挙したこうした類語を駆逐して、socialist (社会主義的) が統括的な地位を確立しえたのは、ようやく1860年代に入ってからのことである。

「社会学」sociologyという言葉の19世紀における境遇は、socialistにきわめて類似していた。「社会学」は、大きく見れば、「社会」の〈社会主義的〉用法という大河の、一つの支流と見なすことが可能であろう。

周知のように「社会学」sociologieは、オーギュスト・コントA. Comteが1839年に、ラテン語の「社会」socioとギリシャ語の「学」logie (>logic) を合成することによって作り出した、新しい学問名称である。「社会学」も、たとえばプルードンProudhonの創始したphalansterian (ファランステール的) と同じように、19世紀の中葉においては、流行の最先端をゆく思潮の新しい意匠の一つにすぎない。学問の世界の中で、一つの専門分野を考究する学として確固たる地位を占めていたわけではない。19世紀の後半における幸運な歴史的事情と社会学者達の努力の積み重ねのお陰で、20世紀にまで生き延びることが出来き、現時点においてアカデミックな一つの学問へ

と成長し続けることが出来た。「社会学」もまた、19世紀中葉に端を発する社会の新しい用法の一つであることは、銘記してしかるべき事柄である。

「社会学」と「社会主義」は、発生の基盤も発生の時期も同じくするいわば「同腹の子」「同胞(はらから)」とみなされるべき二つの存在である。兄弟である限りにおいて、両者の間には、強い連帯感があると同時に、強力なライバルとして、各々の独自性を主張し合わねばならない星のもとに生まれついている。「社会主義」とどこまで共同歩調をとり、どこで独自の道を歩み出すかを正確に見定めることは、社会学の歴史を考える上で、最大のポイントの一つであろう。社会学と社会主義との棲み分けを弁別する作業は、私の社会学史を貫く議論の縦糸をなす。

さてここでTocquevilleの引用文をあらためて見直すことにしよう。彼の表現から窺えるように、「社会」はこれまで隠されてきた存在とイメージされている。直接目に見えるのは「政治制度」あるいは「政府」である。可視的な政治制度や政府の奥底にあり、それらの動きを根底的に規定しているのが「社会」と想定されている。

こうした社会のイメージは、ピーター・バーガーP. Bergerが言及しているアルベルト・ザロモンA. Salomonの比喩を思い出させる。「『社会』とは建築の隠れた骨組みであり、この骨組みの部分はファサード（建物の正面の装飾部分）によって一般の人の目からおおい隠されていた」(Berger, 1963, 訳, 47)。中世でファサードの役割を演じてきたキリスト教的規範が宗教改革で崩壊した後、絶対主義国家の構築した政治的なファザードが同じ機能を引き継いできた。「絶対主義国家の崩壊とともに」、深層の「社会」の存在は広く認められるようになった。真に現実を理解したいと欲するなら、公式的な世界の裏で蠢くさまざまな動機や力の働きに思いを致さねばならない。A. Salomonによれば、ファサードの裏に「社会」が発見された時期は「絶対主義国家の崩壊と同時である」。

Salomonが見据えているのが近代化の始動期だとすれば、Tocquevilleの観察は近代化の本格期に行われており、両者の間には無視しえないタイム・ラグがある。Tocquevilleの場合、「社会」は恐怖あるいは不安の源泉である。ファサードvs.骨組みとうい比喩より、地表vs.地底、あるいは火山の爆発vs.マグマの方が適切であろうと思われる。彼が直接目にしているのは1848年の革命の動きである。革命的動きを支え・生み出す源として「社会」が想定されている。2月革命を「革命」として認識していたのは、若干の運動家あるいは思想家だけであろう。多くの人々にとって、それは混乱であり、困難であり、問題として意識されていたに違いない。当時の言葉で言えば、後世において「革命」と呼び慣わされている出来事は、「社会運動」であり、「社会問題」という用語で表現されるのが普通であった。

「社会問題」・「社会運動」は、普通の人が肉眼で容易に見ることの出来る新しいファサードである。「社会問題」・「社会運動」を噴出させる不可視のマグマ、それが「社会」なのである。

19世紀において「社会」に関連する用語のうちでもっともポピュラーな言葉は「社会問題」だと思われる。「社会問題」は、革命を目指す社会主義者も、それを阻止しようとするリベラルあるいは保守派も、その双方の陣営によって頻繁に用いられ、パンフレット・新聞・学術的著作等のあらゆるレベルで汎用されていた。1848年に生起した出来事を、19世紀中葉の雰囲気をもっともよく伝える記述スタイルで言い表すなら、それは、「社会問題」を解決するための「社会運動」が新たな「社会問題」を引き起こす、社会問題の自己増殖的プロセスとして描き出されるであろう。

「社会問題」は19世紀を浮き彫りにするキーワードである。

「社会」の発見は、P. Berger、A. Salomonの言うように、絶対主義国家の崩壊期、イギリスで言えば、17世紀半ばのイングランド革命、フランスで言えば、18世紀後半のフランス革命の渦中においてである。19世紀中葉に新たに発見されたのは「社会問題」である。「社会問題」が発見された効果として、その発生基盤である「社会」に新しい属性が帰属されたのである。Tocquevilleを不安と興奮に誘ったのは、社会に関する新しい属性の開示であったというべきであろう。

「社会問題」の発見に伴い、それに引きずられ

ようにして、新しい社会的なものごとが次から次へと発見された。社会主義、社会運動、社会改革、社会政策、社会事業、社会福音、社会学等々。「社会問題」をコアに、それを放射状に取り巻いている一連の派生語、「社会主義」「社会運動」「社会改革（ソーシャル・リフォーム）」「社会政策」「社会事業（ソーシャル・ワーク）」「社会福音（ソーシャル・ゴスペル）」「社会科学」、そして「社会学」等々の用語生成を視野に収めるなら、19世紀中葉に発見されたのは、「社会的」という形容詞を冠することにより、出来事・制度・文化を規定するような新しい表現形式というべきであろう。19世紀の時代特性を端的に示すのは、「社会」ではなく〈社会的なもの〉the social である。

政治思想の歴史を研究したシェルドン・ウォーリン Sheldon S. Wolin の表現を借りれば（1960）、19世紀に淵源する固有な事態とは、「政治的なものの凋落／社会的なものの興隆」である。社会史の研究家ジャック・ドンズロ Jacques Donzelot の表現を借りれば（1984）、「社会的なものの発明／政治的情熱の衰退」ということになるだろう。

社会学者の私から言えば、Thatcher は、

There is no such thing as the social.

と発言すれば、学問的に正確だったのである。

3　social と civil

social という言葉の歴史については、市野川容孝の簡にして要を得た研究があるので、ここで引照しておくことにしよう。

social は、ラテン語の socialis に由来するが、日常用語になったのは比較的最近である。市野川によれば、1765年に刊行されたディドロ・ダランベール編の『百科全書』の第15巻において、social という言葉は「最近になって用いられるようになった新しい言葉」と述べられているという（市野川，2006年，89，106）。頻繁に用いられるようになったのは、英語がもっとも早い。17世紀に興隆した「道徳哲学」（ヒューム、ロック、スミスなどがこの学派の代表者）において、social virtue とか social passions といった言葉が用いられていた。こうしたイギリス道徳哲学の影響が18世紀にフランスに及び、『百科全書』において項目 social として採用されるに至った。

ドイツ語に受容されるようになったのは、18世紀末から19世紀初頭にかけの時期である。ドイツ語では sozial と表記されるのが普通であるが、19世紀を通じて social という英語型（フランス語型でもあるが）のままで用いられることも多い。「社会的」を指すにあたり、外来語由来を示す表記の方がかえってインパクトがあると考え、こうした表現型式が好まれたのであろう。逆に言えば、〈社会的なもの〉が、日常用語として流通するには、ドイツ語圏ではまだ少し時間が必要だったのである。

視点を「社会問題」に限定すれば、用語の生成時期をもっと限定できる。田中拓道によれば「『社会問題』という語がフランスに導入されるのは、1830年代初頭である」という（田中，2006，48）。social と同じように、英語→フランス語→ドイツ語という言葉の流れの順序が認められるが、「社会問題」の場合、用語のサーキュレーションの過程は、1830年を挟む10年程度のタイムスパンの間に完了されている。

もしも英語、フランス語、ドイツ語、という三つの言葉をもって「西欧」文明を代表させることが許されるならば、social という言葉が西欧全般に普及するようになったのはようやく19世紀のことであった。思想・学術用語の新しい意匠から、日常用語へと定着してゆく画期は、（1848年革命が起こった）19世紀中葉にも求められるといって大過ないだろう。

19世紀における形容詞 social の興隆は、形容詞 civil の没落と背中合わせに起こっている。19世紀以前では、人間集合や人々の集合的特性を記述する場合、civil という形容詞を用いるのがポピュラーであった。civil の冠された用語のうち著名なのが civil society のケースである。マンフレート・リーデル Riedel によれば（1979）、civil society は、アリストテレスの koinonia politike に淵源し、西欧の古代・中世・近世を貫通して社会認識のキーワードであり続けた。用語としてのピーク期は17世紀から18世紀に求めるのが通例であろう。19世紀から20世紀にかけては、「ブルジョワ

社会」「資本家社会」などと用語上同一視され、その重要性は減ずる一方であった。（例外をなすのが、日本における第二次大戦中から敗戦後にかけての「市民社会」論の興隆であった。）

civil society という用語が息を吹き返してくるのは、20世紀の最後の四半期に見られた社会主義諸国における改革運動の渦中においてであった。社会主義の内部から革命運動の先頭を切ったのが、1980年に起こったポーランドのストライキ運動である。20世紀の最後の四半世紀における civil society の復権は、ドイツ語圏を念頭に浮かべれば端的に知ることが出来る。英語の civil society は、フランス語では société civile と訳されたが、ドイツ語では Bürgerliche Gesellschaft が定訳となり、civil との対応関係がはっきりしなくなってしまった。こうした事態を打開したのが、1980年代初頭におけるポーランドの改革運動である。改革運動の挫折以降、Zivilgesellschaft という言葉が好んで用いられるようになったからである。civil society との継承関係が明確なるのに応じて、ネガティブな含意は払拭され、来るべき新しい社会を象徴する用語となった。

議論を先取りすることになるが、20世紀の最後の四半期は、social という言葉から人々を魅了する力が失われてきた時期である。social の失墜の最も端的な例が Thatcher の社会の死滅に関する宣言であった。social と civil とは天秤にかけられたように、一方の価値が上がれば、他方の価値は下がるという関係にあるように見える。social で形容されるほとんどの現象は、civil という言葉を冠することが可能である。例えば social movement は civil rights movement と言い換えることが可能なように（歴史的いえば、例えば civil law の後に social law が出現したように、逆の関係が通例と思われるが）。しかし the social のコアをなす social problem については、このことは当てはまらない（civil problem という熟語はない）。social と civil との間にある、指示対象の微妙な差異を明確にすることもまた、私にとっては興味ある課題をなす。

4 〈社会的なもの〉の高度な移転能力

〈社会的なもの〉の「発見」は、――Donzelot 流に表現すれが〈社会的なもの〉の「発明」は、19世紀という時代特性を離れては考えられない。〈社会的なもの〉の展開を大きく左右した要因として、19世紀の刻印は決定的であった。

「19世紀の刻印」としてさし当たり二つのことが重要である。

その一つが、〈社会的なもの〉は、フランス革命を前提として、初めて存立しうる特性であるということである。Tocqueville の表現を用いれば、それは「すべての政治制度をかえることを通じて、相互に支え合っていこうとした」、それ以降の出来事である。「フランス革命」についてさまざまな規定の仕方が可能である。市民革命、民主主義革命、自由・平等・博愛の三色旗の理想、人間の理念等々、政治的立場や思想信条の違いによって、アクセントのおかれる局面は微妙に推移する。しかしここで注目したいのは、フランス革命に関する「記憶」が〈社会的なもの〉を構成する上で決定的要素となっている、という点である。

「社会問題」と言うことで意味される内容は、次稿で立ち入って論じるように、多種多様である。「社会問題」を構成する上で決定的な契機をなすのは、フランス革命の約束した理想と生み出された現実との落差である。フランス革命は人々に「しかじかかくかく」の希望を抱かせた、しかし現実は、そうした希望の実現にほど遠い。約束不履行という意識、満たされない期待が、直面する現実を「社会問題」として構成せしめたのである。フランス革命で約束された理想の実現を求めて、人々は「社会運動」に赴くことになった。

社会学の歴史にとって重要なのが、平等の理想である。フランス革命は人々は生まれながらにして平等であると宣言した。人の上に人を作らず、という考え方を、人々はフランス革命から学んだ。しかし現実はどうであろうか。あらゆる局面で、人と人の間には格差が存在する。所有の格差、教養の格差、政治的権利の格差、労働条件の格差等々……。人々の間にさまざまな「格差」を

発見し、それを告発し続け、是正を求めるづける、という志向が、「社会問題」のボディー部分を形作っている。平等の理念が社会主義と社会学に貫通するものであったことは、議論する中で次第次第に明らかになるはずである。

Tocquevilleは言う。「1848年1月29日の下院で行った、……私の演説では、もっとはっきりと切迫した調子になっている。……議員諸氏よ、……［労働者階級の中で］彼らの政治的といわれる情熱が、社会的になったのはご存じでしょうか」（Tocqueville，1850／93，訳，31）。

フランス革命は、すべての特権を破壊したと言われている。しかし、所有の特権が人間の平等に対する主要な障害物として残された。民衆は、今度は、所有の特権を廃絶しようとする。なぜなら平等こそが、民衆達の求める至上の神だからである。

「社会問題」の中には、確かにフランス革命の積み残し問題が存在した。その限りで、フランス革命と「社会問題」解決の営み（社会運動、社会革命）を連続したもの捉えることもできる。しかし「社会問題」の大半は、フランス革命当時の人々がそれを知ったら、私たちはそんな問題の解決を約束をした覚えはないと、びっくりして拒絶するものであろう。社会問題とフランス革命の解こうとした問題との間には、飛躍あるいは断絶がある。事態に即してみれば、両者はまったくの別物と捉える方が正しいのが大半である。しかし、フランス革命当時の人々が想像も出来ない事柄であるのに関わらず、後世の人にとっては、フランス革命のお陰で、「社会問題」を思いつくことができたのである。19世紀の人々は、フランス革命を想像力の源泉として、現実を「社会問題」として構成し、その解決に向けて、共同して現実に立ち向かっていったのである。

19世紀後半、「社会問題」はヨーロッパ諸国を、燎原の火のように席巻したばかりでなく、始動期のグローバリゼーションの流れにのって、世界の各地に飛び火していった。「社会問題」は「社会」を発生基盤に生成するものだとするなら、「社会」が存在しないなら、「社会問題」は起こりえないはずである。しかし西欧以外の地域では、事態むしろ逆であることの方が多い。「社会問題」の輸入を契機に、「社会」の不在が問題として浮上し、それを契機に「社会」形成の動きが活発になる場合も多い。

たとえば、産業的企業家（ブルジョワジー）と工業労働者（プロレタリアート）の間のコンフリクトは、「社会問題」の典型である。ブルジョワジーもプロレタリアートもごく僅かしかいないロシア帝国において、先鋭な「社会問題」が起こった。コンフリクトの内実は、農奴的な農民と領主的な地主の間の「前近代的な」関係に由来するものであったにも関わらず、「社会問題」として事態は構成された。「社会問題」の当事者という定義の効果として、それぞれがブルジョワないしプロレタリアとして己を自覚するようになり、両者の関係は資本主義的な経済関係へと移行していった。その結果、ロシアにおいて「社会」は徐々に形成され始めることになった。

また日本では、西欧近代に対する理解の深まりとともに、「社会」の不在が痛烈に意識されるようになった。社会の不在の糾弾、社会形成の動きこそが、むしろ「社会問題」の内実を形作っていた。社会の不在に由来する社会問題が長年にわたり議論されたり、その解決を模索したりするなかで、〈社会的なもの〉が人々の間に徐々に醸成されてきたのである。

深層の社会の客観的な条件が同じでも、表層に噴出された「社会問題」の強度は異なることが多い。またそれどころか、客観的条件が深層に存在しなくても、否存在しないがゆえに、「社会問題」が先鋭化することもありえた。社会と社会問題との間のこうした一見不可思議な関係性は、多分、〈社会的なもの〉が、たとえば「産業的なもの」に比べると、想像力の産物である度合いが強いことに由来するだろう。〈社会的なもの〉に関する思想史が構想されてしかるべきなのは、こうした理由からである。

5　科学による社会問題の解決

〈社会的なもの〉の発見が、19世紀半ばになされたことに由来する第二の刻印は、社会問題解決のために新しい学問が召喚されたことである。「科学」に対する明るい見通しは、19世紀の時代

的特質である。神の啓示ではなく人間の理性に行為の根拠を求める近代初頭の「啓蒙主義」は、「科学への信頼」という形に姿を変えながら、知識人から大衆へと普及していった。「前に我々が直ぐにヨオロツパといふものと結びつけるのが政治と科学であると書いたが、その政治と科学が今日の我々の知つている形を取つたのは確か十九世紀に入つてからのヨオロツパだった」（吉田，1970，63）。デモクラシーと科学が、19世紀を貫通する、種別的特性であった。

「社会問題」解決のために最良の力として期待されたのは、民衆の決起、軍事力、思想闘争といったものではない。解決のための最大のポテンシャルは「科学」に託された。「社会問題」を解決するために様々な科学が構想され、組織化された、というのも見落とすことの出来ない時代特性である。1848年の「革命」は、フランス革命の単なる蒸し返しではない。それは「社会問題」として認識されるがゆえに、その解決のために「科学」の威力が高らかに宣言された、空前の（もしかしたら絶後の）変革運動であったのである。

1848年革命において、「社会主義」が、初めて歴史の舞台に登場した。社会主義の信条と実践の体系を劇的にマニフェストしたのが、マルクスとエンゲルスの起草した『共産党宣言』である。『共産党宣言』は、我が国ではとりわけ有名なものであるが、その起草勢力は、当時の社会主義運動の決して主流ではない。『共産党宣言』をマニフェストした途端、マルクスもエンゲルスも弾圧を受け亡命を余儀なくされ、雌伏の時期を過ごすことになった。『共産党宣言』は、短期的に見れば、失敗したマニフェストである。何度かの挫折経験を積み重ねる中で、大衆の心をつかめるようになったのは、ようやく19世紀も末になってであった。『共産党宣言』が一部の前衛の専有物から労働者大衆へと普及してゆき、社会主義運動の聖典になり得たのは、エンゲルスの書いた『空想から科学へ：社会主義の発展』（フランス語版，1880／ドイツ語版，1882）のお陰である。

エンゲルスは「マルクス主義」の正当性を「科学的」であることに求める。社会主義が現在から未来を主導する主義・主張である所以は、それが次第次第に「科学的に」なものへと発展し続けるところに存する。『空想より科学へ』というタイトルは、19世紀に生まれ・育つためには、どのような栄養素が必要であるかを端的にあぶり出す。働く人々の主義主張である「社会主義」ですら、科学的であることが求められていた。社会主義の攻撃を受けて立つ側の知識人、エスタブリッシュメントに属する人々が依拠すべき主義主張には、一層「科学的な」装いが要求されるのは理の当然であろう。

社会問題の解決に志向した新興科学として、歴史的に最も早いのが1834年に設立された「ロンドン統計学会」Statistic Society of London の試みであろう（参照。Abrams，1968）。最初の50年の間で、統計学会の席上で報告されたテーマは511あるという。そのうち、統計学の方法を論じたものは11にすぎない。それ以外のものは、現実的な諸問題に関する応用的テーマを論じている。テーマは四つの部類に分類されている。1. 経済統計（127項目）、2. 政治統計（80項目）、3. 医療統計（95項目）。注目に値するのは「道徳的・知的統計」と呼ばれる第四のカテゴリーである。この四番目のカテゴリーは、まもなく「社会的」と改称された。「社会的統計」は98項目、その内の90項目が下層階級に見られる貧困、犯罪、無識字等々を扱っていたという。ロンドン統計学会における「社会的」カテゴリーのしめる比重のこうした大きさゆえに、アブラムズ Abrams は、イギリス社会学の起源を1834年に求めている（ibid.note）。

社会問題の解決を「科学」に求める傾向は、1850年を越えると一気に加速する。1865年にはアメリカ合衆国において「アメリカ社会科学協会」American Social Science Association が結成される。その設立趣旨書において「社会科学」が取り扱うべき具体的問題が列挙されているが、要するにこの協会では「貧困とそれに関連する諸問題が注目されるだろう。……つまり現代の大きな社会問題を賢明に取り扱うための共通の場を提供しようとするものである」（宇賀，1990，89～90）。

社会問題の解決に志向した学会として、日本でとりわけ有名なのが、1872年ドイツにおいて設立された「社会政策学会」Verein für Sozialpolitik である。社会政策学会設立の引き金になったのは、1872年10月に開催された「社会問題討議会」

Versammlung zur Sprechung der socialen Frage におけるグスタフ・シュモラー Schmoller の開会の辞が引き起こした興奮であったという。Schmoller によれば「独逸帝国の将来は、その社会状態の形成いかんにあり、これは知識階級、所有者階級、与論および新聞等の『社会問題』に対する理解のいかんに懸かっている……」「『ことなれる見解の接近、少なくとも、焦眉の社会問題に関する理解』が集会の直接の目的であった」（大河内一男，1936／1968，231）。

6 〈社会的なもの〉の学としての社会学

学会形成では遅れをとったが、「社会学」もまた「社会問題」解決に志向する形で構想され、発展し続けた典型的な「科学」である。

たとえば The Concise Oxford Dictionary で sociology を引いてみよう。そこには二つの意味がのっている、すなわち 1. とりわけ文明化された人間社会の発展・本質・法則に関する科学、2. 社会問題の研究 study of social problem。行論の中で次第に明らかにするつもりであるが、この二つの定義は、発生史的に見れば、逆の順序が正しい。最初に「社会問題の研究」という規定があり、それをアカデミックな方向に深めていく努力の中から、第一の「近代社会の構造と発展に関わる科学」という規定が産み落とされた。1890年代（あるいは世紀の転換期の）社会学者のお陰で、第一の規定が前面に押し出され、社会学はアカデミックな一つの専門分野として確立されるに至ったのである。しかし、こうした規定はアカデミーの中の「通念」にはなりえたが、普及の範囲は狭いままに止まり、一般の人々の社会学イメージを形作っていたのは、第二の「社会問題の研究」という規定であった。

社会学の研究対象とする「社会」は社会一般ではない。社会問題を噴出させる根源としての社会である。社会問題の基底としての社会（これが「文明化された人間社会」の本質をなす）の構造と発展を考究する、というのが社会学のアカデミーの中で認められた固有の専門分野である。第一の規定の「社会」を広くとれば、社会学は、法学、経済学、政治学等々との区別が付かなくなってしまうからである。社会学がアカデミーで地歩を占めることが出来るようになったのは、こうした社会一般に対して〈社会的〉視角からアプローチする、という自己限定を追加することに成功したからである。ザ・ソーシャル、社会の社会性を考究する、という形で、社会学の固有の認識対象は規定された。ザ・ソーシャルとは、社会そのもの、社会の中の社会、いわば〈二乗化された社会〉のことである。こうした意味での〈社会的なもの〉の認識こそが、他の諸科学のなしえない社会学の固有の任務である。

レイモン・アロン Raymond Aron は、私と異なった経路を辿って、「社会的なものの科学」the science of the social という社会学の定義に到達している（Aron，1965，訳，12）。アロンの定義は、第二次大戦中に生じた〈社会的なもの〉に関する解釈替えの一つのヴァージョンとして、理解することが可能である。こうした次第については、行論の中で明らかになるはずである。

＊彼は「社会学と称するものをそのまま社会学と見なすことにしたい」という原則から出発する。そして全体社会 society、それを構成する（近代的および伝統的な）さまざまな諸社会、あらゆる諸社会の中に現存する要素である社会現象等々を一括するために「社会的なもの」という言葉が用意されている。私のように「社会」と「社会的のもの」の区別に特にこだわることはない。「社会的なものの科学」すなわち社会学の起点はモンテスキューに求められている。社会学の出発点を「絶対主義国家の崩壊期」に見いだす点ではザロモンと軌を一にしている。社会と社会的なものの区別にこだわらないアロンの社会学史は、マックス・ヴェーバーで終わっているのでそれほど不都合は生じないように見える。しかしそれ以降の時期、例えば二十世紀の最後の四半期における社会学の衰退（過度の分散化、中心の消失）というような局面を論じようとする場合、「社会」と〈社会的なもの〉の区別にこだわらない限り議論は空転してしまう（例えばサッチャーの発言の解釈にひどく苦しむことになる）。アロンの死後以降の社会学の展開を視野に収めるためにも、私はアロンと異なり、〈社会的なもの〉と「社会」との区別を明確にしておきたいと思う。

アロンの用語法を踏襲して、議論する途ももとより可能であろう。例えば「社会」概念に関する18世紀から19世紀にかけての変容といった形で、19世紀中葉における「社会的なもの興隆」についても、「社会」という親概念における変容の一こまとして処理

するやり方が、これである（田中，2006，23の注10参照）。こうしたやり方をした場合、「政治的社会」「経済的社会」は表現として問題はないが、「社会的社会」といった言い回しが必要となるが、こうした表現は、私から見ると、蕪雑な感じは否めない。

アロンの社会学史に関して、私から見て最も注目に値するのは、1848年革命をもって社会学史における前半と後半を隔てる分水嶺と位置づけている歴史的見取り図である。彼によれば1848年から1851年に至る過程には二十世紀に繰り広げられた政治的抗争が、濃縮された形で含み込まれているという。彼が重要視する社会学者達は、致命的に重要なこの時期について、議論し・分析し・批判しており、しかも「この時期に起こった諸事件について彼らの下した判断は、それぞれの学説の特徴に結びついている」という（Aron, I, 234, 訳, I, 301）。社会学の理論のアクチュアリティーを測る試金石として「1848年革命」が用いられている。

私もまたこうした視点を継承したいと思う。ただ私の場合「社会学」という言葉を用いる際に、念頭に浮かべられているのはアカデミーの中で地歩を占めている「制度化された」形のものである。「1848年革命」期には、「社会学」は、いまだ星雲状態にあるものと見なされ、学としてはさまざまな発展の可能性が内包されており、「制度化された」意味での「社会学」といったタームにより包摂させることは出来ない、というのが私の基本的スタンスである（この論点については、次稿において立ち入って論じたい）。それ以前の仕事は、後世の視点からの読み込みを通して、はじめて専門科学としての「社会学」のなかに回収することが可能となる。19世紀後半の動きを視野に入れるなら、あまりに「社会学」という名称を早く使いすぎると、当該期間における社会思想史における思考の飛躍をうまくつかみ出せない危険性が生じてしまうだろう。

＊アロンの議論の出発点は「社会学と称するものをそのまま社会学と見なすことにしたい」というものであった。「社会学と称していない」ものをも「社会学」のなかに繰り込むのは、アロンの立場からすればやはり「禁じ手」とするべきであろう。

社会学は〈社会的なもの〉の認識に特化した科学というべきである。こうした社会学史の見取り図なかでは、「1848年革命」は社会学の歴史が出発する起点として位置づけられている。社会学の歴史は、研究対象である〈社会的なもの（社会そのもの）〉の生成・発展・消散という地平から描き出される。社会学が蓄積してきた理論枠組みは、研究対象である〈社会的なもの〉に視点を据えることによって、その形態変容の連続性と切断性との双方をマーキングすることが可能になる。研究対象と分析装置とは、相互に拘束し合う。研究対象のイメージ（像）が変われば、分析装置も変わらざるをえない、逆に、分析装置が変われば、それによって構成される研究対象像も当然変化する。

「社会学」の歴史は、〈社会的なもの〉の歴史とコインの裏表の関係にある。私は拙著『社会認識と想像力』において広義の「社会」に着目して、西欧における社会認識（社会諸科学）の歴史を通観しようと試みた。今回は、〈社会的なもの〉に視点を定めることにより、欧米における社会学の歩みを鳥瞰したいと思う。議論のカバーする時期は1850年から2000年までの150年間、取り上げられる業績は、専門分野としての社会学（法学、経済学、政治学等々他の社会諸科学と区別された一つの専門分野としての社会学）に限られている。

一世紀半にわたる社会学の歩み通観する、これが私の解くべき課題をなす。

引用・参考文献

Abrams, Philip, 1968, *The Origins of British Sociology: 1834–1914,* The University of Chicago Press; Chicago.

Aron, Raymond, 1965, *Main Currents in Sociological Thoughts, I, II,* Penguin Books Ltd.; Harmondsworth.（北川隆吉・平野秀秋・佐藤守弘・岩城完之・安江孝司訳『社会的思考の流れⅠⅡ』1974年、法政大学出版局）。

Berger, Peter L., 1963, *Invitation to Sociology,* Doubleday & Company; New York.（水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』1979年、思索社）。

Donzelot, Jacques, 1984, *L' invention du social: Essai sur le déclin des passions politiques,* Fayard; Paris.

Engels, Friedlich, 1883, *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschft.*（大内兵衛訳『空想から科学へ：社会主義の発展』岩波文庫）。

市野川容孝、2006、『社会：the social』岩波書店。
厚東洋輔、1991、『社会認識と想像力』ハーベスト社。
大河内一男、1936、『独逸社会政策思想史』（→『大河内一男著作集』第一巻、第二巻、青林書院新社、1968年）。
Riedel, Manfred, 1979, “Bürgerliche Gesellschaft”, in *Gesichtliche Grundbegriffe,* Ernst Klett Verlage; Stuttgart. （河上倫逸・常俊宗三郎編訳『市民社会の概念史』1990年、以文社）。
田中拓道、2006、『貧困と共和国：社会的連帯の誕生』人文書院。
Thatcher, Margaret, 1987, “Talking to Women’s Own Magazine”, October 31.
Tocqueville, Alexis de, 1850/1893, *Souvenirs.*（喜安朗訳『フランス二月革命の日々：トクヴィル回想録』1988年、岩波文庫）。
宇賀博、1990、『アメリカ社会学思想史』恒星社厚生閣。
Williams, Raymond, 1976, *Keywords: A vocabulary of culture and society,* Oxford University Press; New York. （岡崎康一訳『キーワード辞典』1980年、晶文社）。
Wolin, Sheldon S., 1960, *Politics and Vision: Continuity and Innovation in Western Political Thought,* George Allen & Unwin Ltd.; London.（尾形憲男・福田歓一・半澤孝麿訳『西欧政治思想史』1975年、福村出版）。
吉田健一、1970、『ヨオロツパの世紀末』新潮社。

"The Social" as a Sociological Problem

ABSTRACT

This paper is an introduction to a general overview of the 150-year history of sociology from the middle of the 19th century to the end of the 20th century. Sociology, in this case, is a discipline comparable to jurisprudence and economics, and is clearly identified as a different discipline from social science in general. It is the story of the rise, decline, and revival of "the social" that provides clues to describe the history of sociology.

Sharing the same route with such terms as "socialism" and "social problem," "sociology" first appeared as a new word in the 1830s. "Social problem" was the most popular phrase that was well known to members of every stratum from the top to the bottom in the 19th century. The February Revolution of 1848 was an epoch-making event that created a horizon and domain—inevitably called "the social"—by placing social problem in the center, around which various terms preceded by the adjective "social", e.g. social movement, social reform, social policy, social work, social gospel and so on, are arranged.

Whereas social science in general has gradually been formulated since the 16th century in order to make a scientific study of "society", sociology can be designed as a new science that focuses on "the social" as its own discussion target. As symbolized by the statement; "you know, there is no such thing as society. There are individual men and women, and families.", made by former British Prime Minister Margaret Thatcher in 1987, "the social" was born in the middle of the 19th century and had a history of being guided to death in the fourth quarter of the 20th century.

What drives the developmental process of sociology is the history of the rise and fall of "the social" as mentioned above.

Key Words: sociology, social problem, the social.